

## 茅の輪（兵庫区）

兵庫区平野に祇園（ぎおん）神社があります。祇園神社では祭日に「蘇民将来子孫人也（そみんしょうらいのしそのひとなり）」と書いた守り札（ふだ）を出しています。これには、こういう話が伝わっているのです。

大むかしのことです。武塔天神（ぶとうてんじん）という神さまが、妻を求めてあちこちと旅をしておられた時のことです。ある土地までこられた時、日が暮れてしまいました。その土地には、蘇民将来（そみんしょうらい）と巨旦将来（こたんしょうらい）という兄弟が住んでいました。弟の巨旦はたいそうお金持ちで、家や倉（くら）を百ももっていたのですが、兄の蘇民の家は、ひどく貧しい生活をしていました。

武塔天神は、はじめ弟の巨旦の家に行ったのみました。

「こんや、ひとばん泊めてくださいませんか。」



巨旦はお金持ちでしたが、けちんぼうだったのでことわりました。

つぎに武塔天神は、兄の蘇民の家に行ったのみました。

「こんや、ひとばん泊めてくださいませんか。」蘇民は貧乏でしたが、心のやさしい人だったので、「何もおもてなしはできませんが、それでもよろしかったらどうぞ。」と心よく泊めて、粟（あわ）の飯（めし）をごちそうしてくれました。

それから何年かたったある日、武塔天神は八人の子どもをつれて、ふたたび蘇民の家をおとずれました。

「前にはたいそうお世話になり、ありがとうございました。きょうはその恩返しに寄ったのです。」

といて茅（かや）の輪（わ）をつくって、蘇民の家の人たちの腰につけさせました。ところがその夜のあいだに、蘇民の家の人たち以外の村の人たちは、みんな死んでしまいました。

あくる朝、生き残っているのが蘇民の家の人たちだけであるのに気がついて、びっくりしているところへ、武塔天神がやってこられました。

「じつは、わたしは素佐男神（すさのおかみ）である。このち悪い病気がはやれば、蘇民将来の子孫だと書いた紙を門口にはり、茅（かや）の輪を腰につけておけば、悪いことや病気は免がれる（まぬがれる）だろう。」といい残して、どことも知れずに出ていきました。

この話は、あちらこちらにもあります。いまも、あちこちの神社で六月と十二月のみそか（一番最後の日）に、茅（ち）の輪（わ）くぐりをするのもそのためです。

